

先住民村落における宗教文化の変容

これまで台湾の先住民村落における災害復興について文化人類学的アプローチで分析を試みてきた。今回は宗教文化の側面から日本統治下のブヌン(布農族)村落の変化を分析してみたい。なお、本分析は、2012年から2014年にかけて筆者の調査地である高雄市桃源区で断続的に実施した聞き取り調査に基づいている。

ブヌンの伝統的宗教

日本統治期以前のブヌンの宗教については、次のように概説できる。かれらの宗教の基礎となるのは hanitu(精霊)という信仰で、hanitu は動物や植物、土地や石などのいかなる自然物にも備わっていると考えられる。そして、それぞれの自然物の hanitu は独特の力を内在しており、同じ範疇の生物や自然物でも、それぞれの hanitu の力は異なる。そして生物が死んだり、自然物が消失したとき hanitu が物質から離れて、消失してしまう。このような特徴は人間にも相似している。人間の hanitu はその人の行為に影響を与え、その活動の最終的な結果は、自らの hanitu の力が生物や自然物の hanitu に勝るか、それとも負けるかによって決まる。このような信仰に基づいてブヌンは日常生活のさまざまな問題を解釈し、解決しようとしてきた。そして同様の hanitu を共有する親族は、必ず関係する禁忌を遵守しなければいけない。人間の病気や夢占はすべて hanitu に関係している。

もう一つ重要な信仰は dehanin(天) というものである。それは風、雨、雷、月、太陽、星などの力に関わっている。dehanin の力は日常生活においては顕在化することはないが、災害(水害、干害、地震、病気、戦争)が発生した時に注意が向けられる。災害を解決するために、人々は儀式を行って dehanin(天) に向かって感謝を伝える(黄 2006:27-29)。

宗教儀式としては、主食である粟作にかかわる農耕儀礼、懐妊や新生児の祝福などの儀礼、狩猟や出草の儀礼があった。とくに粟作にまつわる農耕儀礼は、非常に発達しており、年間 100 日間の儀礼謹慎期間があった。また、粟は多く蓄積するほど名誉なこととされたので、その年に収穫された粟はまず当年分の食料とされることがない、威信財としての価値を有しており、粟の豊作を祈るための出草(首狩り)も盛んにおこなわれていた。

そして、この粟作儀礼とも深く結びついているのが、ブヌンの社会構造である。ブヌン社会は徹底した父系原理に基づく氏族制社会で、大中小の三段階の氏族組織がすべての出自の基礎となっている。たとえば初穂の粟や種粟、穀倉から取り出した最初の粟、収穫時にこぼれ落ちた粟などは hulan と呼ばれる「禁忌の粟」で、同一大氏族メンバー以外の者は決して食べてはならなかった。またこれを食べた者同士の結婚はきびしく禁じられた。また中氏族のメンバー間では、狩猟によって得られる獣肉が分配された(長沢 2001:160)。

このように、日本統治期以前ブヌンの伝統的宗教は hanitu と dehanin が基本となっており、主食であった粟を中心としたさまざまな農耕儀礼を生み出しただけでなく、ブヌンの社会構造を構成する徹底した父系原理にもとづく氏族制社会の維持にとっても重要な役割を果たしていた。

日本統治期以降の近代化：生業の変容

しかし、このような粟作を中心として著しく発達した儀礼的な謹慎期間や、「禁忌の粟」をとおした父系氏族組織の維持は、日本統治期から大きく変容することとなった。それは、台湾総督府が

生産性向上のために、先住民村落において水田による稲作を奨励したためである(松岡 2012:118-158)。

筆者が調査地出身の 80 代ブヌン女性に対しておこなったインタビューでは、「日本が私たちに住むようにと瑞穂村(日本統治期に形成された調査地の元となった村落)を作ったとき、警察と学校が村落の中心にあり、各戸に分配された農地には灌漑用水が設けられ、水田で稲作するよう教えられた」と当時を振り返る。1940年代に形成された瑞穂村は、統治の利便性のため、それまで近隣の山々に分散して居住していたブヌンの人々を集団移住させて作られ、各戸に耕作地が与えられた。終戦後、統治者が日本から中華民国へ入れ替わるという大きな社会的混乱や、日照りや疫病流行が発生したため、水の管理が難しくなり、まもなく水田による稲作は継続できなくなったという。

これにかわって、以前から栽培していた陸稲やイモ類、政府が栽培を奨励した木薯(キャッサバ)を栽培するようになった。これは「戦後、住宅を建設するためにコンクリートが必要になったため換金作物として価値が高かったキャッサバの栽培やシイタケの採集が広まった」ためであると上述の女性は説明した。このように粟作が減少していくなかで、粟作に関する儀礼も衰退していくことになった。ただし、現在でも調査地では高齢者は少量の粟を栽培し、家族や親しい知人の間で食べたり、ブヌンの文化イベントで使用したりしている。

1930年代以降の皇民化

このような生業活動の変化のほかに、日本統治期に推進された台湾先住民に対する皇民化教育も伝統的な宗教儀礼の簡略化や廃止などをもたらした。これは、伝統的な農耕儀礼では多くの食料が浪費され、儀礼的狩猟や時には首狩りがともない、治安が乱されるという統治者の見方が理由であった。皇民化とは一種の同化政策であり、日中戦争が始まる前後の 1935 年ごろから皇民化運動として強化され、各村落に作られた神社への参拝が強制されるようになった(松澤 1994:51)。ただ、調査地には当時を知る高齢者がいないため、筆者は 60 代のブヌン男性に聞き取り調査したところ、「天皇」や「日本精神」などについて語られることはなく、調査地において「皇民化」が具体的にブヌンの人々にどのような影響を与えたかについて詳しく知ることではできなかった。

日本統治期における集団移住、水田稲作の奨励は、それまでの伝統的なブヌン族の生業である粟作を減少させ、さらに皇民化による伝統宗教に基づく儀礼の簡略化や廃止によって、粟をめぐる禁忌に深く関わるブヌン社会の基盤となる父系氏族組織の紐帯を弱めることにつながったと考えられる。このような伝統宗教を揺るがす社会的変化が戦後のキリスト教への集団改宗の社会文化的要因となったのである。

[参考文献]

黄應貴(2006)『布農族』三民書局。

長沢利明(2001)「ブヌン(布農族)」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧：日本からの視点』風響社、160～164頁。

松岡格(2012)『台湾原住民社会の地方化—マイノリティの 20 世紀—』研文出版。

松澤員子(1994)『台湾先住民の文化—伝統と再生—』国立民族学博物館。